

日本推理小説史

第三卷

# 日本推理小説史

## 第三卷

中島河太郎

東京創元社

## 著者略歴

大正 6 年 鹿児島市生  
昭和16年 東京大学国文学科卒業  
昭和30年 第 1 回江戸川乱歩賞受賞  
昭和41年 第19回日本推理作家協会賞受賞  
昭和45年 和洋女子大学教授  
昭和60年 日本推理作家協会理事長  
平成 3 年 和洋女子大学・和洋女子短期大学学長  
平成 8 年 和洋女子大学名誉教授  
ミステリー文学館館長

## 日本推理小説史 第三卷

1996年12月20日 発行

著 者 中 島 河 太 郎

発 行 者 橋 本 治 夫

発 行 所 株式会社 東 京 創 元 社

東京都新宿区新小川町 1 - 5

電話 03・3268・8231 (代)

振替 00160 - 9 - 1565

印刷・工友会 製本・鈴木製本

© Kawatarou Nakajima 1996 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-488-02307-X C 0095

# 目次

|      |               |    |
|------|---------------|----|
| 第一章  | 渡辺温と潤一郎       | 五  |
| 第二章  | 浜尾四郎の足跡       | 二  |
| 第三章  | 「獵奇」について      | 六  |
| 第四章  | 海野十三誕生        | 三  |
| 第五章  | 甲賀・大下論争       | 三  |
| 第六章  | 雑誌「探偵小説」      | 三  |
| 第七章  | 「文学時代」と書下し全集  | 三  |
| 第八章  | 浜尾四郎の探偵小説論    | 三  |
| 第九章  | 「ふろふいる」五年史    | 四  |
| 第十章  | 小栗虫太郎の出現      | 六  |
| 第十一章 | 「黒死館殺人事件」について | 七  |
| 第十二章 | 木々高太郎誕生       | 七  |
| 第十三章 | 昭和十年前後の翻訳     | 七  |
| 第十四章 | 甲賀の探偵小説論      | 九  |
| 第十五章 | 甲賀・木々論争       | 二〇 |
| 第十六章 | 甲賀・木々論争その後    | 二二 |
| 第十七章 | 「ドグラ・マグラ」について | 二六 |

|       |               |    |
|-------|---------------|----|
| 第十八章  | 春秋社の書下し長篇     | 三七 |
| 第十九章  | 「探偵文学」と「月刊探偵」 | 三三 |
| 第二十章  | 「シュピオ」について    | 三三 |
| 第二十一章 | 「探偵春秋」始末      | 三六 |
| 第二十二章 | 乱歩の通俗長篇       | 三六 |
| 第二十三章 | 渡辺・大阪・蒼井その他   | 三七 |
| 第二十四章 | 橘外男の怪奇・冒険小説   | 三七 |
| 第二十五章 | 久生十蘭の登場       | 三八 |
| 第二十六章 | 乱歩の評論と研究      | 三八 |
| 第二十七章 | 横溝正史の転身       | 三九 |
| 第二十八章 | 昭和十年前後の伸張期    | 三九 |
| 第二十九章 | 匿名批評家胡鉄梅      | 四〇 |
| 第三十章  | 戦争前夜の情勢       | 四〇 |
| 第三十一章 | 「新青年」三十年史     | 四一 |
| 第三十二章 | 連作・合作探偵小説史    | 四二 |

「ぶろふいる」所載作品総目録

索引

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 二五 | 二六 | 二七 | 二八 | 二九 | 三〇 | 三一 | 三二 | 三三 | 三四 | 三五 | 三六 | 三七 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|

# 日本推理小説史

## 第三卷



## 第一章 渡辺温と潤一郎

渡辺温と二つ違いの兄啓助は、幼年時代を深川の河岸で過ごした。その猿江町付近は東京でも代表的なスラム街の一つであった。

渡辺家の本籍は秋田県仙北郡白岩村にあるが、温は北海道の上磯郡谷好村で、明治三十五年八月二十六日に生まれた。父がセメント会社の技師で、その社宅に住んでいたからである。三歳で深川に移ったのだが、小学生時分に活動写真にとりつかれた。近くに映画の常設館はなかったから、三年生の温と五年生の兄は、本所まで片道だけでも二時間かかって見に行った。

それほど夢中にさせたのは、毎週連続上映される「ジゴマ」だった。

温は茨城の水戸中学校に首席で入学したが、小説の耽読と映画に熱中して学業を怠けた。慶応の予科文科に入学したが、周囲に反対されて退学し、ポオの作品に心酔した。

兄や友人と共同自炊生活をしながら、声楽やギターに熱中し、匿名で雑誌に短篇を発表しはじめた。大正十三年、「女性」や「苦楽」を発行していたプラトン社が、映画の筋書きを懸賞募集したのに応じて、「影」を投稿し、谷崎潤一郎、小山内薫の選で一等に当選した。

貧しい画家が展覧会の出品作を製作中、モデルに逃げられるが、小説家に唆かされて借金に出向いた貴族の画室に、そのモデルが鞍替えしているのを認める。小説家は作品に託して、恋敵を夢遊病者となって殺すように仕向ける。貴族の殺された姿を見た画家は、自分の影が殺したと思いこむが、それは小説家とモデルの仕組んだ罠で、二人は画家



渡辺 温

が自殺するだろうとほくそ笑む。自分の画室へ戻った画家は、帷の影の心臓めがけて刺すが、その陰から現れたのは小説家の死体だった、という筋である。

メルヘンとサブタイトルのあるこの作品は、当時の映画製作技術では手に負えなかったろうし、また大衆向きストーリーともいえなかったから、とうてい映画化は望めなかった。

温の不慮の死を悼んで筆を執った谷崎潤一郎の「春寒」に、その経緯は詳しい。もう一人の選者小山内の選んで一等にしたものと佳作数篇の中から、潤一郎は「影」を採った。

唯此の「影」だけが鮮やかに図抜けていたのである。僕は一読して「カリガリ博士」の画面を浮かべた。筋がすぐれているばかりでなく、その原稿の字体、文字の使い方、インキの色、字配り等にまで、何かしら作者のシッカリした素質を想見させるに足るものがあつた。此れは事に依ると、ただ此だけの作者でなく、長い将来のある人だなど、直覚的に感じた。

といって潤一郎は意外な獲物を得たように喜んだ。ところが小山内は、この懸賞募集の意図が当選作品を映画会社に製作させ、雑誌の宣伝に使いたいことと承知していた。その立場からすれば『影』は筋としておもしろいけれども、映画化するのに難色がある。第一演技が非常にむずかしい。当時の映画界では無理なものを当選させても無意味だというのである。

潤一郎は、こんな作品でも映画化される時代を早く招来するためにも、推挙するに限るとだだをこねて、とうとう

入選させた。谷崎の「真意は、たまたま此処に見出された、すぐれた素質のあるらしい青年作家の将来を慮った」からである。

だが小山内の予想したように映画にはならなかった。温は賞金一千円を得て、盛んに酒を飲むようになり、築地小劇場に入り浸り、セクストン・ブレイク物語を訳した。

兄啓助の思い出によれば、当時の千円は今日の二、三十万円にも相当するが、賞金の届くのが、間に関東大震災という異変があったのでだいぶ遅れた。

賞金をあてにして莫大な借金をしていたから、届いた時には雲散霧消したばかりか、足が出たのを教師になりたての給料から月々返したという（探偵作家クラブ会報、昭和二十七年十二月）。

実は応募したのが十三年の七月で、入選したのが十一月、震災はその前年のことだから全く関係がない。また潤一郎の随筆でも、入選者が慶応の学生であると耳にしたが、一年ほど経って、辻潤が「影」の作者を連れて来たというので会ったら、すでに「新青年」記者であったとある。温が博文館に入社したのは昭和二年だから、ここにも誤りがある。近親者、当事者の記憶でも、ずいぶん事実と齟齬する場合が多い。

潤一郎は温の第一印象に触れて、「ヴァガボンドネクタイ、長い髪、暗い茶色の服、瘦せてはいないがゴツゴツ骨張ったいくらかゴリラの腕を想わせる長大な四肢、東北タイプの凹凸のある陰影の深い容貌、おまけに神経質らしい眼をし、『カリガリ博士』の絵に出て来るアランによく似ていて、『影』の作者の姿として心に描いていた通りのものだった。このくらい想像と実物とがピッタリ合ったことはなかった」と述べている。

入選の縁で小山内に師事し、雑文や短篇を書いていたが、同時にシナリオを「映画時代」に発表し、監督になりたかったらしい。しかし「新青年」の編集に携わるようになって、創作活動が盛んになった。「嘘」や「少女」には、作者のようなはにかみ屋でおしゃれな青年が登場し、純情と意外性をからませた抒情的な物語が展開される。

「可哀相な姉」（新青年、昭和二年十月）は、啞の姉に育てられた少年が、だんだん成長し大人になりかけると、姉は大人になることを嫌う。少年は姉が花売りであるのを疑って、紳士に変装し、姉が客を取る商売だと知って客を殺し、姉に殺人の罪をきせて、自分は新生活の決意をするのである。

温の代表作として知られているものだが、抒情と残酷味とが交錯して異次元に案内されるような陶酔感を誘う。

一時、博文館を退社して文筆生活に入り、「勝敗」などを書いた。兄嫁となった女性への思慕と確執を描いたものだが、「影」とともに谷崎好みの主題であった。それより「父を失ふ話」（探偵趣味、昭和二年六月）が、啓助のいうように「追いつめられた情況における孤独な人間のふとした出来心を（中略）さりげなくユーモラスでリリカルな表現で」、「単にコントとして手軽く読み過ぐすには、何とはなしに胸に滲透してくるベエソスが湛えられている」のである。

温の目ざしたのは当時勃興した探偵小説ではなかった。本格物はもちろん、変格物ですらなかった。コント風のシナリオの視覚化を夢見ていたこの夢想家は、たまたま当時の探偵文壇が純粹の作品でなければ採らないといったような排他性がないのを幸い、「新青年」の記者となり、同誌や「探偵趣味」に発表したままで、せいぜい意外性の隠れ蓑を用意した程度であった。

江戸川乱歩の代訳をした「世界大衆文学全集」のボオの訳は、名訳として好評を博したが、翻訳で窮乏を凌ぐもの限界があって、四年の末には再び「新青年」に舞い戻った。

温は「影」の縁で潤一郎に会ったことがあったから、「新青年」にその作を貰いたがっていたが、延び延びになっていた。殊にその頃は「蓼喰ふ虫」を完成し、「正」に専念して他は一切断っていた。

温としては再入社の土産に百枚ぐらいの創作が欲しかった。

後に長谷川修二名義で翻訳家となった檜原茂二が神戸のユニバーサルに勤めていて潤一郎と親しかったので、温は

檐原を通じて潤一郎を口説こうとした。

檐原は小説の話をしないからこそ谷崎が出入りを許しているのだからと断っても、温は原稿がとれないと博文館をクビになると脅した。

二人は作戦をたてて谷崎を訪れたが、檐原が書いて貰えないと渡辺は辞めなければならぬと口走ったため、責任を自分に預けて義理攻めにするのは困ると、谷崎を怒らせた。それでもどうやら翌日までに随筆を書く約束をしたくれた。

温は嬉しくてたまらず、今夜は是非飲むといってきたが、夜中まで檐原を相手にした。午前一時ごろ神戸から車に乗り、阪急線の夙川に出るため汽車の踏切りを越えようとした途端、貨物列車と衝突した。二人ともぐっすり寝込んでいたが、運転手と助手は車外にほうり出されて軽傷、檐原も無事だった。ひとり温は脳底骨折で、近くの西宮回生病院に運ばれ、間もなく死亡した。二十八歳であった。五月十日未明の出来事である。（長谷川修二「渡辺温ちゃんのこと」日本探偵作家クラブ会報、昭和三十七年六月）

その経緯と故人の印象は、前記谷崎の「春寒」（新青年、昭和五年四月）に仔細に述べられている。谷崎は故人の追福のためにも、「影」の映画化ができれば、地下の故人と小山内が手を執りあって喜ぶのではないかと言いつ添えているが実現しなかった。

告別式は森下雨村宅で、通夜は横溝正史宅で行なわれ、「新青年」は「春寒」を載せた号に、サトウハチローの温の霊に捧げた詩「断章」と、遺稿「兵隊の死」を掲げた。

遺稿の散文詩には人生の喜びを知った兵隊と、その美しく安らかな死が描かれている。才華を秘めたまま不慮の事故に仆れた故人を懷うと、一層痛惜の情をそそられる。

潤一郎に見いだされた温は、寄稿の確約をとりつけたその夜死んだ。そしてその原稿は彼の追悼の情に溢れていた。

一年半経って潤一郎は「武州公秘話」を同誌に連載した。この異色長篇が生まれた陰には、大きな犠牲が払われているのである。

〈推理界 昭和四十四年十二月〉

## 第二章 浜尾四郎の足跡

昭和三年であったか、江戸川乱歩は名古屋の小酒井不木の書齋で、浜尾四郎と探偵小説を結びつける消息を、はじめて耳にした。その折り不木は、浜尾君が探偵小説を書くかも知れない。私は今それを頻りに勧めているのです。多分書くだろうと思う。書いて呉れば探偵小説壇の為大変喜ばしいことだ、と興奮気味に話した。

乱歩は不木と四郎とがどの程度の知り合いだったか知らない。多分その頃、四郎がある堅い雑誌に、マクベスとか日本の歌舞伎だとか犯罪劇に関するエッセイを発表していたのを、不木が注目して文通がはじまり、創作を勧めたのではなからうかと想像している。

しかしこの推測はすこしうがち過ぎている。犯罪劇に関するエッセイは大正十二年のことで隔たりがありすぎるし、それよりも昭和二、三年に「新青年」に犯罪隨筆を発表しているから、そのほうの因縁であった。

四郎は明治二十九年四月二十四日、東京麹町五番町に男爵文学博士法学博士加藤弘之の長男である医学博士加藤照磨の四男として誕生した。

弘之は但馬国出石藩士の家に生まれ、蘭学を学んで蕃書調所教授手伝となり、ドイツ語を通じて西洋の政治社会の研究を進めた。幕府の直臣となり開成所教授職に就いたが、明治元年の「立法政体略」でわが国に立憲政体を紹介した。明治政府の下では大学大丞、外務大丞となり、初期には啓蒙家として「真政大意」「国体新論」などの著述で天賦人權論を唱えた。十五年にはこの二著を絶版にし、社会ダーウィニズムにもとづく「人權新説」を刊行し、キリスト教を攻撃したりして論議をまき起こした。元老院議員、東京帝国大学総長、帝国学士院長、枢密顧問官などの要職を

歴任している。大正五年死去。

四郎は大正七年に東大法学部独法科に入学したが、その年末に子爵枢密院議長浜尾新の養子となった。休学したため卒業は十二年だが、その年すでに「犯罪人としてのマクベス及マクベス夫人」を「日本法政雑誌」に発表し、「復讐劇に就ての一考察」や「犯罪心理学より観たるゲルハルト・ハウプトマンの人々」など、異色の論考が書かれている。こういう論考を執筆した動機は、わが国では文学と法学があまりにひどく提携を拒みあつてきたことに對する抗議からであつた。

此の二つのものは各々同じ対象をつかみながら而も殆ど近づく事無しに進んで来た。文学に生きるものにとつて法学は全く無視せられていた。法を究めんとする人々からは文学は殆ど省みられずに過ぎた。私は将来此の二つの間にお互に何等かの意味に於て妥協し合う事があるか、あるべきかそれは知らぬ。唯私は此処に或る法律家の見たる文学上の作を紹介することによって、其の事が決して無意味な事では無いという事を示したのである。という趣意であつた。

法学を専攻しながら文学に熾熱な関心を寄せていた若き日の四郎は、せめてその兩分野に橋をかけるような方向を摸索していたことがはっきりする。大学を卒業したばかりの四郎としては、まだ独り立ちでこの至難な分野にとり組むことはできなかった。

「犯罪人としてのマクベス及マクベス夫人」は、デンマークの法律家オーグスト・ゴルの研究を、「出来るだけ忠実に」紹介したものであり、「犯罪心理学より観たるゲルハルト・ハウプトマンの人々」は、刑法学者エーリヒ・ウルフェンの研究を、「大体彼の著述に従つて述べ」たものであつた。

四郎は十二年に大学を出て司法官試験を命ぜられ、翌年、東京区裁判所検事代理となった。十四年には父親の後を襲って子爵となり、また検事に任ぜられ東京地方裁判所に勤務した。

彼が探偵文壇にかかわりをもつようになるのは昭和二年からで、「新青年」に「落語と犯罪」を寄稿している。その実父は寄席の愛好家で、幼い彼をよく連れていった。そして自分は黙ってすこしも笑わずに謹聴していた。

「少年の私を斯う謂う娯楽場に案内して呉れた父の此の教育法は教育家から言わせれば甚だ怪しからぬものであったかも知れない。然し私はそういう教育をして呉れた父に対して無限の懐しさと感謝とを感じて居る」と回想している。四郎は落語をきいているうちに、「持前のつむじ曲りの偏痴奇気分」から、一種変わった方面からの観察を試みてきた。それは落語に現われる種々な事件を、法律的に見たらどんなものか、という研究である。落語の本質が喜劇だから、深刻な犯罪や当事者にとっては生命にも関するような犯罪が出てくるが、それらは笑殺され、被害者にまったく同情がない、という特色がある。

「被害者に対して全く同情を表さず、犯罪を滑稽化し滑稽視し去るところに即ち落語の面目がある。被害者の立場を尊重し、之に同情を以て臨む時は犯罪事件は凡て悲劇となる。落語は決して被害者に同情して居ない。之が犯罪を喜劇化して行く根本の要点である」

この観点から犯罪に関する落語を縦横に論じている。その続稿「犯罪落語考」が発表された直前の昭和三年八月には、検事をやめて弁護士を開業した。

この頃の「新青年」や「文藝春秋」に載った彼の犯罪エッセイが、不木の目にとまったのであろう。不木は面倒見のいい人柄であり、有力な作家の出現を望んでいたから、熱心に勧説したろうし、また四郎自身も元来文学に関心が強く、在野法曹に転じた気楽さが、創作執筆に踏み切らせたものであろう。

その処女作「彼が殺したか」は、「新青年」の四年一月から二月にかけて発表された。

実業家夫人に愛された学生がその邸宅に泊まった夜、夫妻とも殺され、しかも凶器を持ったまま、学生がその傍に立っているという惨劇が突発する。弁護士である筆者は学生が犯人のはずはないと思いながら弁護に努力するが、学生自身が進んで犯行を認めるので死刑に処せられる。そのあとに手記が添えられ、異色ある動機が語られ、心理の解明にも新鮮な観察眼を働かせている。同時に証拠らしきものがあれば自信をもって罰することもできるが、なければ不正を罰することができないという、法律の無力さに挑んだ野心作であった。

すなわち四郎がとり組んでいた法律への疑問を小説の形態で吐露しており、観念的殺人遊戯を素材とする作家とは出発点から異なった動機で作品の筆を執ったのである。

第二作「悪魔の弟子」（新青年、昭和四年四月）は、妻を睡眠薬で殺そうとして、かえってよりを戻した初恋の人を殺してしまい、殺人の罪に問われている男が、かつて同性愛関係にあって自分を悪の道におとし、今は検事となっている友人に真相を告白した書翰体小説で、主人公の救いのない愛情の桎梏が如実に表現されている。「黄昏の告白」（新青年、昭和四年七月）は、作家大川が執筆に行き詰まりを感じているとき、好敵手米倉は名声隆々たるばかりでなく、妻と姦通し、その上子供まで米倉の胤ではないかと疑う。そこで強盗の侵入を幸いとし、妻を殺して強盗のほうは正当防衛と見せかけて殺したが、苦悩のあげく自殺を企て、親友の医師山本に告白する。山本がその疑惑は確かだ、なぜなら自分こそ姦通の相手だったと述べたとき、大川の呼吸は絶えてしまう。大川の子、すなわち実は山本の子は遺品のピストルで過失死し、山本も自殺するという、愛情の疑惑を冷酷に描いた佳作である。

中でも「殺された天一坊」（改造、昭和四年十月）は、作者自身犯罪小説としての会心作であり、自信作であった。大岡越前守の裁判は名声が高かったが、判決の誤りを指摘する事実が現われるに従い、大岡は自己の知恵に自信を失う。だが、事実をこまかく詮索するより、天下の法のありがたさを知らさせることが大事だと自己の権威に対する自信を取り戻した大岡は、天一坊の落胤なることを承知の上で、治世のために偽者と判定するという筋である。